

## 洋14-104 (ショートコメント)

### 「ローマ環状線、めぐりゆく人生たち」

☆☆☆

2014 (平成26) 年8月24日鑑賞<シネ・リーブル梅田>

監督・撮影・音響：ジャンフランコ・ロージ

原案：ニコロ・バッセッティ

編集：ヤコポ・クアドリ

2013年・イタリア、フランス映画・93分

配給/シンカ

◆ドキュメンタリー映画としてはじめて、2013年の第70回ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した映画がこれ。しかも、チラシによれば、「ベルナルド・ベルトルッチ監督や坂本龍一など審査員から満場一致の絶賛を浴び、『風立ちぬ』などの強豪を押し退けて金獅子賞を見事に獲得。」したらしい。こりゃ必見。そう思って鑑賞したが、タイトルどおり、「ローマ環状線、めぐりゆく人生たち」を描いた(だけの)、退屈な映画だった。

◆チラシには、「1日の車の交通量16万台、全長約70km、大都市を取り囲むローマの環状線。その周辺には旅行者たちが知らない愛すべき人たちの暮らしがある。スポットライトを浴びることもなく懸命に生きる人々の人生に目を留めると、その風景の中に喜び、怒り、哀しみ、そして夢が見えてくる。」と書いてある。たしかに、そのとおりの映画だが、それをそのままスクリーンに表現して一体何が面白いの？

◆「未来へと突き進む大都市ローマと、そこからこぼれ落ちた人々の愛おしき人生」に登場してくるのは、①木の中の「音」世界を研究する植物学者、②ブルジョアを装い偽りの今を生きる没落貴人、③忙しい合間を縫って年老いた母親の面倒をみる救急隊員、④後継者がいないことを憂う、ウナギ漁師、⑤子守唄を口ずさむ両性具有の車上生活者、等々だ。

スクリーン上には、環状線の沿線に部屋を借りて、2年半も住み込む中で、ジャンフランコ・ロージ監督が撮影したという彼ら彼女らのナマの生活がモザイクのように描かれていく。

◆しかし、それが映画としてどう面白いの？残念ながら、私にはそれが全く理解できない。私が毎週楽しみにし、鑑賞する映画を選ぶについて参考になっている新聞記事が、金曜日の日経新聞夕刊の記事だ。そこで読んだ映画評論家・中条省平氏の評では、本作は星4つ(見逃せない)で、「ここに人生がある、と私たちはため息をつく。」と高く評価していた。そんな記事の影響もあって選択したのだが、今回ばかりはどうもそれが失敗だったようだ・・・。

2014 (平成26) 年8月26日記